

土屋正義編輯

繪本石山軍記

第三編

五

遠
2269
25



14 特
2269
23



冷泉町尻ノ東
妙覚寺
信忠宿陣

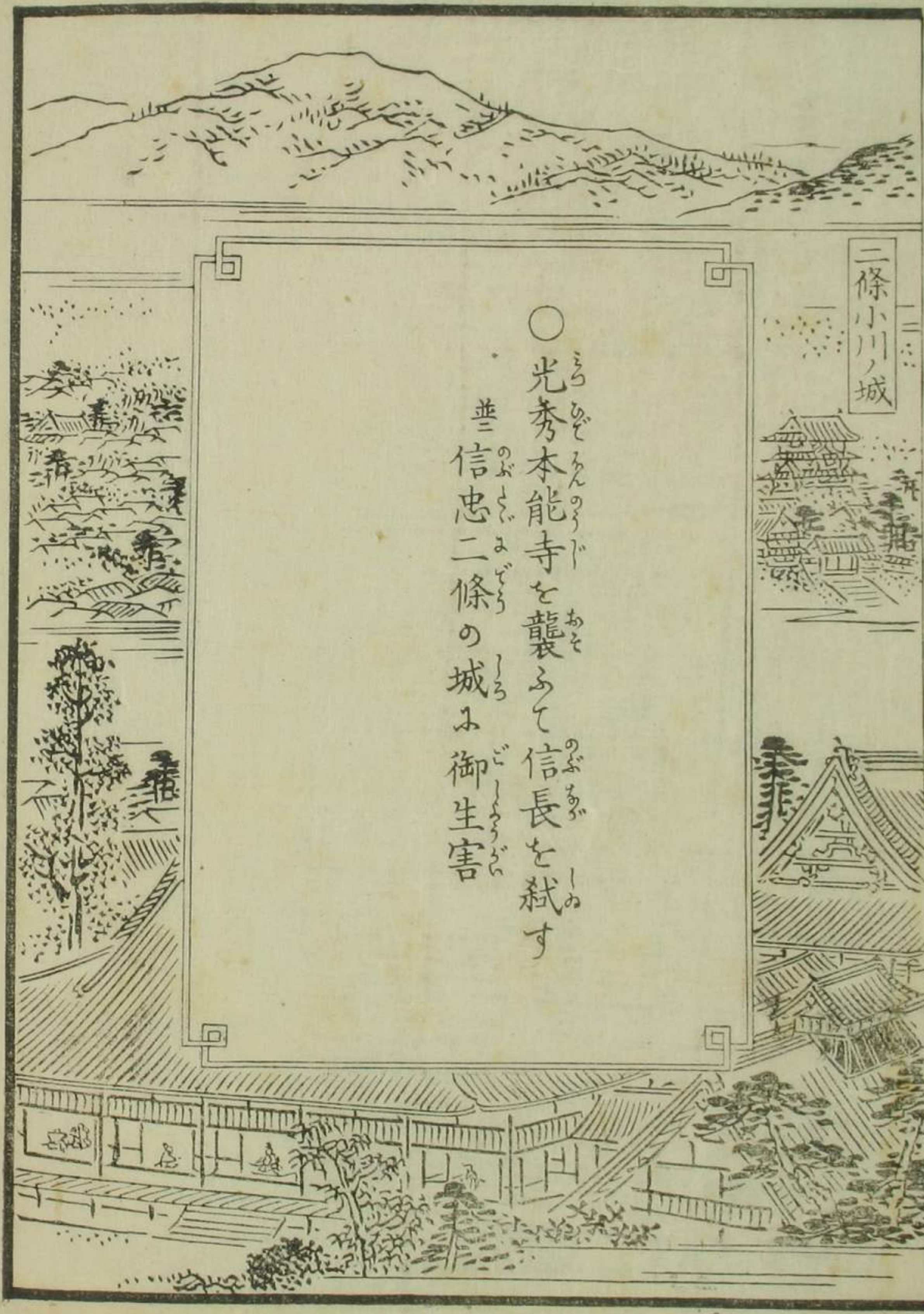


繪本石山軍記第三編卷之五目錄

- 教如上人罪名を厭はざし石山に留まらば給ふ
- 並 石山城雷火靈刹回祿
- 維任日向守光秀鷺の森に密書を送る
- 並 下間頼康理義を演じ疑評を

信長陣所
茶坊門
西洞院
本能寺





二條小川ノ城

○光秀本能寺を襲ふて信長を弑す
 兼 信忠二條の城に御生害

繪本石山軍記第三編卷之五

王屋正義編輯



教如上人罪名を厭はず石山に留り給ふ兼石山城雷火靈利回祿
 備も織田内大臣平の信長公は本願寺頭如上人退去の上は早石山の
 城地請取べしとて佐久間右衛門尉信盛矢部善七郎兩個に命じ石山
 城へ趣りしも處此時石山の城中に於ては頭如上人の御嫡男なる光壽
 教如上人留り御座しとて再度門徒を打談合猶も堅固に籠城し防
 戰の準備嚴く手配城地引渡すまき氣色更りなき由斥候の兵士皆に
 々まば佐久間矢部の兩個大まに驚き急ぎ信長公へ是と言上す信長公
 は前に頭如上人の退城途中に打漏ししるに裡業腹も熟る所へ今亦新

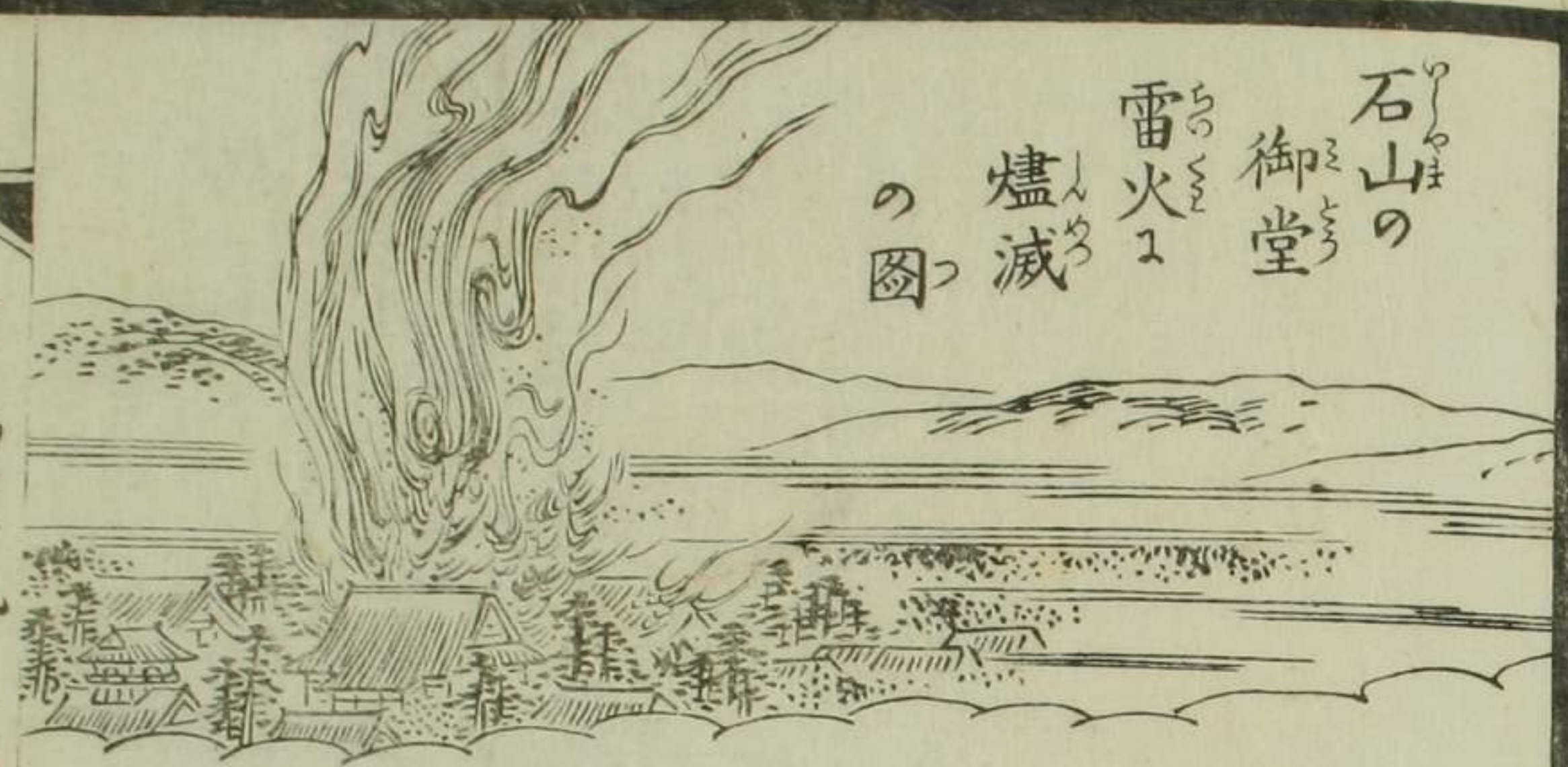
石山軍記三編卷之五

門光壽勅詔小違の誓書に背きて籠城と聽争つ是を怒り給を
んや今は諸國の軍兵を催促し頭如父子の首を看ずんば誓つて軍は還
すはと日來の憤怒百倍に募り東海東山北陸の軍勢を催し介躬ハ
先京都に馳登り直に禁廷へ参内有る頭如父子の違勅の罪を奏聞
し渠們急ぎ誅伐命ト給はるべき宣言を下し給へりて連つて奏し給
ひ多き禁廷先信長と押宥りれ頼小諸卿を集めて評議あり信長の
奏聞如何も所理なり再度勅使を鷲の森へ立得与糺聞の上沙汰すべ
しとて信長の方へ勅命下りて翌日勅使紀昞へ御下向あり勅使上人へ
尋ね給ふ様々未だ嫡子光壽石山籠城ハ勅を背くの條言語同断速
に開城せざるに於ては朝敵本願寺を誅伐すべき倫旨を信長に賜ふ

べき哉偽なく返答稟さるべし責給ふ上人恐き入る勅答有様今
般勅命の重きを恐き誓書を背くべしと惶異儀なく當地へ退
き候ふ新門光壽一向同心仕とて頭如が本意に相逆ひて強ち石
山に留り候ふ段天意の程恐き入奉り屢意見を加へ候へども曾以て同
意仕らざる候故に親子別心潔白の為に介節光壽ハ勘當仕り俺許り
退去仕りて社候へ渠儀に於ては預る所非ず天意に任せ給を
ぞしと詞よほす答へ給へを勅使庭田兩卿鷲の森を退き再び石
山城へ御下向有て違勅の罪を糺明し給ふ教如上人謹んぞ答へらる
様抑今般當山織田と和融の事件勅命ハ父而已承引りて退城の儀
勅答致し候ふ由光壽漸く後聽候へども貧道に於てハ父より以て

一向一言の相談にも違はず神以て承り稟さぬ緯且信長ハ表裏不
信の將と俺們が退城の時を窺ひ殺害せんと謀るも知難く屢此緯
を以強諫すれども父曾く光壽の詞を用ひず却て貪道を勘當致
す條今ハとも父子の因は断て候ふ況父當山と出るの時泉州堺渡海
乃場所にて亂妨狼籍の兵士来りて己に主従等しく危急の風説
正しく信長の所為と存じらる候ふ是を慮るに父子諸とも當
城を開き他邦に移らば信長が姦謀違約り阱り永く宗門廢失
せん悲し箇様一籠城して候ふより恐縮有つて回答給へば兩
卿均しく曰ふ様ハ普天の下王民に非ざるはか一勅を以和睦さ
しめたまふに随ふべく籠城せらば却つて宗門潰す朝敵ふらば

や信長の姦謀と知ながらにも夫ハ退城の後沙汰すべきなり朝敵の
名を蒙り父に背き剩へ宗門退轉小違ひもせば宗祖へ何と乎公解
せらる哉一度朝敵の名を被る者王孫權門の貴族より共眷族榮久
き一例を聞ず殊一沙門ハ如法に勅し随ひ唯速りに當山を退き何
國よてもあれ心靜に法流を勸化有んと宗祖の心にも協ふべき乎
と理義明くに諭し給ひ々々ば教如上人も固辭に術多く拜諾乃旨
勅答ありて此上ハ来る七月廿八日まで諸方の岩残り引拂ひ當城
と相渡し稟すべき旨兩卿へ御答へ有るハ兩卿是を聞届け給ひ直
ちに歸浴有せられ々々憊り一程に石山城ハ勿論なり木津樓の岸河
分口丸山廣芝正山鹿嶋萱振を始め摂河泉の間五十一箇所の岩々に



石山の御堂の雷火の燼滅の図

石山の雷火と佐久間父子追放と同時日ありしに此所を画くべし
小あはれと雖も図上之餘白有るをうつくし
之を画く而已看官怪し
咄むるをなす



佐久間甚九郎

佐久間信盛

しんを画



佐久間信盛父子天王寺對墨追放

せらるる 図

籠置より軍兵の者們今日を限り開き明て已が様々右往左往小引拂ふ教如上人の信長公の害心を察せし開城七月廿八日と勅答おまじも定日より三日早く御動座あり密に御船小召給ひて海上無難に紀昴鷲の森へ主従一統来着し給ふ然まじも一旦天朝表へ對して御勘當の旨御披露おれを御父子御同住も鬱艷依之新門教如上人に播作三備小下向ふしと勸化すべしと思し召しまじも御内は僧俗數多召連御父上人へ暇乞して先播昴の地を志ぎしと下給ふ去程に信長より城請取の有司佐久間矢部の両士再び下向し石山の城に入し展檢し詰々に番兵を入し相護らせ堅固に手配居しり所新門御退城より間もなき僅日數の七日過や過す八月二日の夜乃

灰の刻より俄に一天かき曇る等く大雨恰も盆を覆すのぶし一陣の暴風吹出るに列て雷声轟々として鳴破き倍々雷雨烈し降て一声の霹靂震ふと思へば立地石山城中の堂梁に落下り人皆心を打し恐を伏る然るに堂梁の上より焼出し須臾番兵も心着ざる内焰火飛彈ぞく諸堂に傳り一字も残らず回祿に逃ぶ是偏に靈場を蕙も兵馬の足に汚き人緯を佛の深く惡し給ひてや斯ハ焼亡せし給ひし信心の輩ハ入佛陀の靈驗を感得ける往昔明應五年蓮如上人當石山を建立在りてより今年天正八年まで八十五年の間相續有けるを一夜に當山灰土と成ぬる緯門下の道俗声を上げ悲歎限りを無りにり頭如上人の紀昴鷲の森に御煩慮なきも移住しり尚信

長の狼心と恐き給ひ不時の攻寄を請なん々家長諸門徒小到るまぐも上下薄氷を踏心地をて安き心を更に無りき

○鷲の森旧事記云く教如上人も謀つて石上に残り既六月も早や半

過一々共一向に退城の儀勿り一々信長大きに怒つて起請文を破り

勅命に背き父命に悖る大悪不赦の重罪人なり先所々の岩を攻破

り余後石山を退治すべくて池田勝三郎信輝父子に逞兵二万余騎

を引卒せしめ七月二日より同十三日まで所々の岩悉く落去す尤も

御父子同城に御座一時八籠兵心一致に堅めて防禦も鉄壁の如く

かり一故数年の籠城も敗軍もなく信長數回利を失へども今は御

父子格別よなくせ給へ々地の利も人の和も速ばさる所々の岩一時

に攻破らる敗兵何國ともなく脱走をす小ぞ教如上人も御覚悟

定められ既小御自害にも速べる所城請取の憲司の一個大善七

郎之を助け進らる竟に七月廿八日石山城を善七郎速に請取て同く

八月二日教如上人にも余波惜くも石山退去あり余鳥八泉助佐野

川まで初憂旅に落着給へる佐野川の孫市と云る者あり夫婦信

者にて傳き奉り家の背る塚穴に隠し進せ倘く八織田の討手乃

ものも来ん乎と深く内外を用慎しけるが追来る敵兵も無りなれば

大きに安堵の思ひをなして紀扇へ送り届け進しすなり

川又七郎の一條に相似通ひる説といへども御門主にも四月に御退寺あり

て疾紀扇へ御移轉在ども教如上人石山に残り給へる禁裡の逆鱗

信長の憤り頭如上人殊更に御心痛にて日夜肺肝を苦しめ給ふ所
 信長公寛仁大度を垂て教如上人へ助命を許され石山の城無事
 渡せし緯甚信長満足せりとの仰せなり依之上人より御禮の使節と
 一 家臣藤井藤左衛門尉八木駿河守平井越後守の三個をわけて
 近衛殿勸修寺殿庭田殿御同道にて同年八月十日安土へ下られ石山
 の城七月念前小相渡し稟すまき吉誓紙を以て御請稟せし所新
 門教如儀徒者の勧めに同心せられ暫く延引に違ふ遅失稟し一説の條
 なく恐縮仕る所寛仁大度の御恵を蒙り教如が一命助け遣りまは
 緯重々の御洪恩忘却仕らざる依之御禮の為として三人の使節を参上
 せしむる所なりと信長公へ黄金馬代三百兩太刀一振國文卷物百端

信忠卿へ銀子千兩太刀一振盛國卷物百端其外家老諸侍士へも夫
 夫聘禮を進ぜられ各々之を受納致されり此上ハ互小御入魂
 に仰せ談ずれば御懇義願はく候ふと々聽し三使ハ御暇給はり紀節
 鷺の森へ歸りける亦信長公よりも返禮と々矢部善七郎を使
 節に立ちまき今般石山の城地此方へ受取首尾埒明満足候ふと御
 門主へ黄金五百兩縮と二百卷杉原百束北の方へ帷子四十同く生絹
 廿五黄金百兩家老按察使法橋へ黄金二百兩刑部卿法眼少進法
 橋少進仲之等へも同く二百兩宛遣りまされりば頭如上人大きに歡
 せ給ひ使節善七郎に種々美膳を盡し銀子百兩帷子二十五賜あり
 けまば善七郎も深く打悦びて頂戴ふと々歸國に速べり中畧者も是

まぐ石山御籠城の間ハ諸國の門徒さか衆人も道の往返さく成難り
すに今般御和睦の後ハ閑解て世間廣く通路を免さき幾内近
國の門徒僉拳く鷺の森へ群集たりて累年の御籠城御辛苦の
程御痛ハく存奉るく涙と俱小御機嫌伺へを頭如上人衆
庶に仰せらるる様佛力の加護と云言ながらも人の信力精心を受さる
せば奚ぞ今無事の法流相續せん哉浮生の大慶是に過すと曰ひけ
る然バ今般籠城落去の轉末を諸國厚志の門下の人へ稟し聽せ
て安堵させし下間少進法橋仲之へ急いで仰せ付らるる直ちに
御印書を以て飛脚を仕立諸國へ下し觸られ々亦御門主鷺の森
へ御動座の時給骨く助け進らるる塚の浦の門徒中の方へ御禮旁

々御書と遣ハさる御書の馬の前 鷺の森旧事記採要

去程に織田内大臣信長公ハ該年来心に懸らるる憎妬し思し
召さる石山本願寺を勅命を借て速に退去小進びて絆濟々さば豫て
積り宿恨を散ト屢愉快の眉を開われ々石山の城地見今すべし
八月二日安土の本城御立有て京都より宇治に到り給ひ船く浪速
に下向有る諸事の仕置を定め給ふ尤信長公の御旅營ハ天王寺城
に入せらる然るに二日の夜乃半に到り震動雷電く石山城ハ搔消
す如く焼亡せらるば信長来給へども焼地と成り見今其詮無りければ
信長も最本意なくぞ思はれり嗚呼夫人口に佛敵法敵忌數
万の門徒を慙害する信長城地に入絆をば佛智不思議の通力をわら

堂閣殿舎小踏入せしめて天火を降して焼失しや三寶に敵對惡徒
 ハ諸佛之を救ふの力なきと諸經の中に數多出り信長佛法僧余躬の武威に
 慢心し叡山を焼立本願寺を苦ら偕夫程の手柄もなぐて罰報遂に積
 りて臣下の為小害せられ給ふ非道の責苦小遭る皆皆暴惡驕慢此
 酬なるは實に慎むべく恐るべきなり此時信長公の仕置の中に思ひを
 寄ざる不仁の計ひ有舊臣暱近の衆士乃中に旧き不忠不勤の事を処め
 俄小改易せしむ人多くあり余先老臣の衆士にも佐久間右衛門尉信盛
 同く子息甚九郎正勝此父子織田家小於く古老と謂七刃の軍勢を与
 力に加へ天王寺の附城小差置所石山の小敵に向ひ徒過し是と云仕出
 たる軍忠も亦長信の光陰傍觀の行状古老なる者の所作は非ず信

長書立を以て數箇條を懲され楠長庵松井友閑を使者とて一介憚
 急を問せ給ふ所は信盛父子返答亦赤面す竟に天王寺より追放
 とふる佐久間父子大に驚き今更途方に暮りけるが亦如何も
 為方ふれば僅小黄金二十枚を懐中に一腰小佩さる刀指添の外は躬
 に随へる者も亦紀伊國高野山を志ぎて兩羽抜れ禽の如く寥々立
 出る心の裏推量られて最哀れあり一同じ十七日信長上洛し給ひ又林
 佐渡守安藤伊賀守を旧失云立遠流せしる乍廢此林佐渡守秀成ハ信
 長公の御父公ふる備後守信秀殿より附置れ信長未三郎殿と稟
 す頃より四家老の一個と呼れ々々美作守信行が逆意小與一名古屋
 の城にて信長公を討課せんと謀り一々共信長公の武運強くして此大災を

脱遁れ給ひ一が已に昔時誅一給ふべきを先代よりの老臣とを以て這二
 十余年憤りを忍び御座す今天下稍御手に屬するに到り林佐渡守が死
 罪を宥め斯の如く不慮小流刑一處す亦安藤伊賀守の咎と謂を先年
 武田信玄と心を合し信長公を害せんと謀り一緯世に隠れふり一うども
 昔時未天下定まらば味方の將士を罰せん緯敵國の評せん緯も耻しとて
 介終一閣れりふが此序を以て流罪小行はる信長公の生質掌の裏反す
 如く實小危ぶみ恐るべき大将あり羽柴筑前守秀吉にも播州一在て此由
 せ聞達をま寂嘆息して顧れりふが夫先哲の世に遺す的言をも飛
 鳥盡る則ち良弓廢る敵國滅失して謀臣亡ぶと云亦君子の人を使役
 するには介奮惡を咎めずとも云り林安藤が輩罪有と雖も己小改心

して奉仕居り今二心を狭むも非ず又佐久間信盛父子の者偏執
 の心深しと雖も渠們追放までの罪とともふ一今天下を三分にして
 漸余一を得給ふ荒蕪緒業の時一一個もも臣下を育べきに逸くも老
 臣們を改易して慈悲と恵み給ふぬ則ち下より不平の心を生じて大義
 の偉業を崩すに到らん返すくも薄情なきとて深く是を歎れりるもぞ
 明智の察する所違はぬ者哉信長公余威に任し給ひ一度余御所存ふ
 能くぬ者ハ臣を塵芥の如く扱はるを以て光秀の如き逆臣出て主君
 一世の草業を潰して榮昌夢の如くに碎くる緯信長公の御心一把てハ
 無無念遣方無るべきあり

○惟任日向守光秀鷲の森に密書を送る並ひ下間頼廉理義を演て疑評す

諸亦本願寺頭如上人ハ嚮小紀州鷺の森に移轉まゝ信長の反覆と
 恐れ給ひ不時の狼籍有もせん乎と家老諸門徒に至る迄も日夜寢食
 を安んぜず念佛稟すも刀劍を放さず危ふき光陰を送らせ給ひぬ信長
 公にも數年爭戰有一石山の城地を得給ふ上ハ最早余鬱憤も散ぞ
 べきに新門教如上人約は背り水残りて籠城在一縉あは信長私る憤
 り給ひて上表は和平に着せ給へども是非とも上人父子を害せんも此
 と種々工夫を凝し給ひ一が流石小勅詔の趣きと謂向後遺恨ふいと
 認與へと信誓書の墨も乾つざるに攻亡がさん縉も成難く暫く軍事
 の風説ハ無り一程に本願寺の方も些く安堵一今ハ實情の和融お
 らんと上下心を緩め打欲ひて春過秋往て烏兎に任せば毎一の二

箇年の程を穩りあり然る小今年天正十年壬午五月中國毛利家
 征伐の為信長下向有べき由と諸大名に先隊を命ぜり水追々に
 差下さる手配あり且此序を以て四國九局も攻伏らるべきの御
 緯として神戸侍從信孝卿を以て四國征伐の惣大将として二万余騎
 を従つて進發せしむる副將には惟任五郎左衛門長秀等々出陣
 致されり既小摂州西成郡ある難波御津浦小兵船を集り聽て堀乃
 津一を勢揃へ有るより自是前小信長公安土に於て密小信孝小仰せ
 合せらる様本願寺の新門教如緯不忠不孝無論の者に去々年
 一類們退城の時渠一個拒て城小留り開城日限延引の我忒勅を輕
 んト信長を欺り僧徒に似氣ふき不敬の拳止剩へ偽つて驚の森

に父子同住の由聞遠んどり親子彼處小居バ尚幸甚何日まぐり棄
 置ざらんや斯る悪逆犯罪の僧を永く世に徘徊せしむる則は祇邪
 法盛大は蔓充し諸人を妖法小魔魅し天下泰平の功を妨ぐべし然れ
 ども之を明白に征せば又諸國の門徒蜂起し騷乱の級を曳出さし
 今幸に我軍四國乃地へ進發せしむる時節むねを汝長秀と能々
 謀りて不意小鷲の森へ押寄一個も洩さば攻殺して彼宗門の根絶
 一致すべし是信長への孝軍かりし曰ひ々々依之信孝長秀小淡合
 塚の津に手配をふし鷲の森へ押寄んとて暗し其準備を致さ
 れ々々然るに此時節信長公の勇臣丹及龜山惟任日向守光秀にハ
 主君信長公を恨み奉る澤柄五箇條有を以て俄小逆謀を企てりし

が是も中國征伐乃先隙を命ぜりれ同年五月廿三日安土を立て丹
 羽龜山城へ歸りけるり逆意の所存を諸臣小語り来る六月朔日主
 君の上洛本能寺として旅館と定め旗本乃勢僅小三百余人滞留
 在との筋出しなれば光秀此時過きしと歡び了事夜襲の手配小
 速びたる恚し光秀心り思惟様今俺信長を討得るとも柴田勝家
 滝川一益丹羽長秀羽柴秀吉何方も信長恩顧の者あり馳登川
 我を討ハ必定其時ハ俺天子を狭して諸國小令して味方を招に
 國々乃固を頼む人は本願寺門主に如方あり原来本願寺門徒の
 面々年来信長に累恨あれども是究竟の荷贍人ありんと思念を
 巡し急使を仕立同く五月廿八日の夜小到り紀羽鷲の森乃御坊へ



明智光秀が
密使本願寺
小来りの図



五
密使

趣りせ密に上人の書状を呈し余文面乃趣意如何と問ふ年来信長
本願寺宗門を憎み法滅令んと思ふよりして石山の地を所望し託
せ度々合戦す速ぶと雖も敗軍而已に勝利を得ず茲小於る禁
庭へ奏し勅詔を以て竟に石山を奪ひ上人御父子が勢を拉ぎ刺へ
今般四國征伐と号し信孝長秀門大軍を卒一塚乃津へ殺向ふに
是余實ハ不意に起つて本願寺を攻人の結構ふり信長ハ天魔の
心に似て佛法を障碍せんす然ば先も神護不退轉の叡山と悉
く焼亡し今亦高野山を滅却せしんす是等の繚共と者るに忍
びず審に仔細と上人に告げ信長の軍勢向ハざる以前小早御准
備有る然るべし一カ一防戰難儀小速び候り光秀竊に救ひ進すべし

兎角に御油断有ましく思ひも寄ぬ報知の書通に上人驚き給
ふ繚大方あり一門中を集り評議有る所光秀今まで當山とは
音信通情せし譯もなきに今斯密事を明し告る繚何とも心得の
なき繚どもかり殊更信長は主君に光秀ハ股肱の臣下之臣也
して主の悪事と言立當寺の荷膽人せん稟すも是亦最訝しき
心底かりと取々議論し速びられ下間頼廉の稟しけるは是ハ必に信
長の謀計の掛罟ありん光秀を以て斯の如く欺き當寺に實之と驚
りし諸方の門徒を呼集り防戰籠居の準備を做ば驚哉本願寺ハ
そ誓書に背き勅命の重きを忘却して信長に敵對の旗立たり彼を
朝敵赦すまじと追討の宣旨を稟し受て討手と差向んと計較ふ

ろくろに猥に噪ぎて人馬を寄なば敵の術中に陥るべし御返翰小遣に
と稟されれば使ハ尔俟歸されり奈何様信長の奸雄にてハ手段
然も有べしと食一同して故意準備ハせざりけるぞ

○光秀本能寺を襲ふて信長を弑し 並びに 信忠二條の城に御生害

天正十年壬午六月朔日織田右大臣信長公に中國征伐御進發と
して江州安土の本城御殺駕あり御嫡信忠卿共上洛在り御躬ハ
四條西洞院ある本能寺をば御旅館として御旗本僅に三百余人を
牽ハ本能寺へ着御し給ふ信忠卿ハ御旗本五百余人を召具し同
日上京二條の城へ入給ふ御親子共微勢を以て上洛有難凶害を招
りて基あり光秀疾より之を考へ愛宕山にて勢揃へせし総軍一万

余騎を三手に分ち先本能寺寄手の軍將ハ明智左馬助光春に選兵
三千七百余人を引卒せし二條の城へは齋藤内藏助利三を軍將と
是も亦三千七百余人を附屬せしむ殘兵三千有余人の勢ハ総大将惟
任光秀之を随へ妙心寺を本陣と定めて朔日の暮過着陣せしとあり
恠く六月朔日の夜小入己り子乃刻過るを合圖として双方一度に押寄つ
つ無二無三小寺門を打割り或は繩梯子以て堀を乘距我一先陣高名
せんし聞を作つて込入々々厨客殿玄關廊下着當る俣小亂入ハ仲
間別當徒士侍周章慌忙何為間もなく極暑の時候の夜中おれん
多くハ裸身に禪一個太刀と鎗と打騒ぐ而已御傍御近習の衆士
までし武具着る際もあられ上下素肌武者にて駈出つて込入敵兵小

度り合ふ君前の勇士誰々と云ハ森蘭丸長康同坊丸長之同く力
九長次湯淺甚助祐俊金森義入齋を始め五十個の近習此処彼所
出息をも継ずに防ぎぬれども敵も信長公を討洩すと千騎一
騎の合戦おれが突とも拂へども瘞まハと寺中拒む計りに兵線入
て信長逃すも打漏すも異口に呼つゝ斬立たり時に御大将信長公
に殿内廣棟端へ馳出給ひ直宿の者寄る敵徒は那的々々大音放
つゝ問せ給つて蘭丸走り来つて蹲踞星の光に旗記を看候ふ所水
色に拮梗乃紋所ハ正々明智光秀の反逆に候ふ飼り狗り掌を
噛り思を雫以報ず人畜今更稟一様おき極重悪人と無念の
泪落して言上は信長公にも切齒一給ひ生憎今無勢ふれども防ぎ

難一唯潔く生害せんと曰ひつゝ白木の太弓左手に拿せしれ末期の一
戦状くせんとして椽側杉戸の陰小突立給ひ庭上屹と看遣とまハ蘭
丸も君の御免許を蒙り御座辺の敵防がんとて引返して廊下口に馳行
り惟任方の従兵の中よりして船木ハ之丞蘭地甚九郎三宅孫十郎木
村治郎右衛門並川金右衛門中村治郎兵衛四王殿亦兵衛の輩軍各々
築地の裡へ躍り入り我一信長公を刺留んとて殿上間近く進み来る
此時御廐の方よりして矢代勝助伴太郎右衛門正林吉吾小身おつゝ
も忠義の者ゆく三個等々一も菟来りつ御殿も憚らば逆賊門天罰得
知ぬらつ蟲も忠義の利刀に息の根止んと罵りふぐら斬て懸る船木
蘭地三宅木村の輩噫小賢一やと中に把込双方屈せば瘞まらず戦

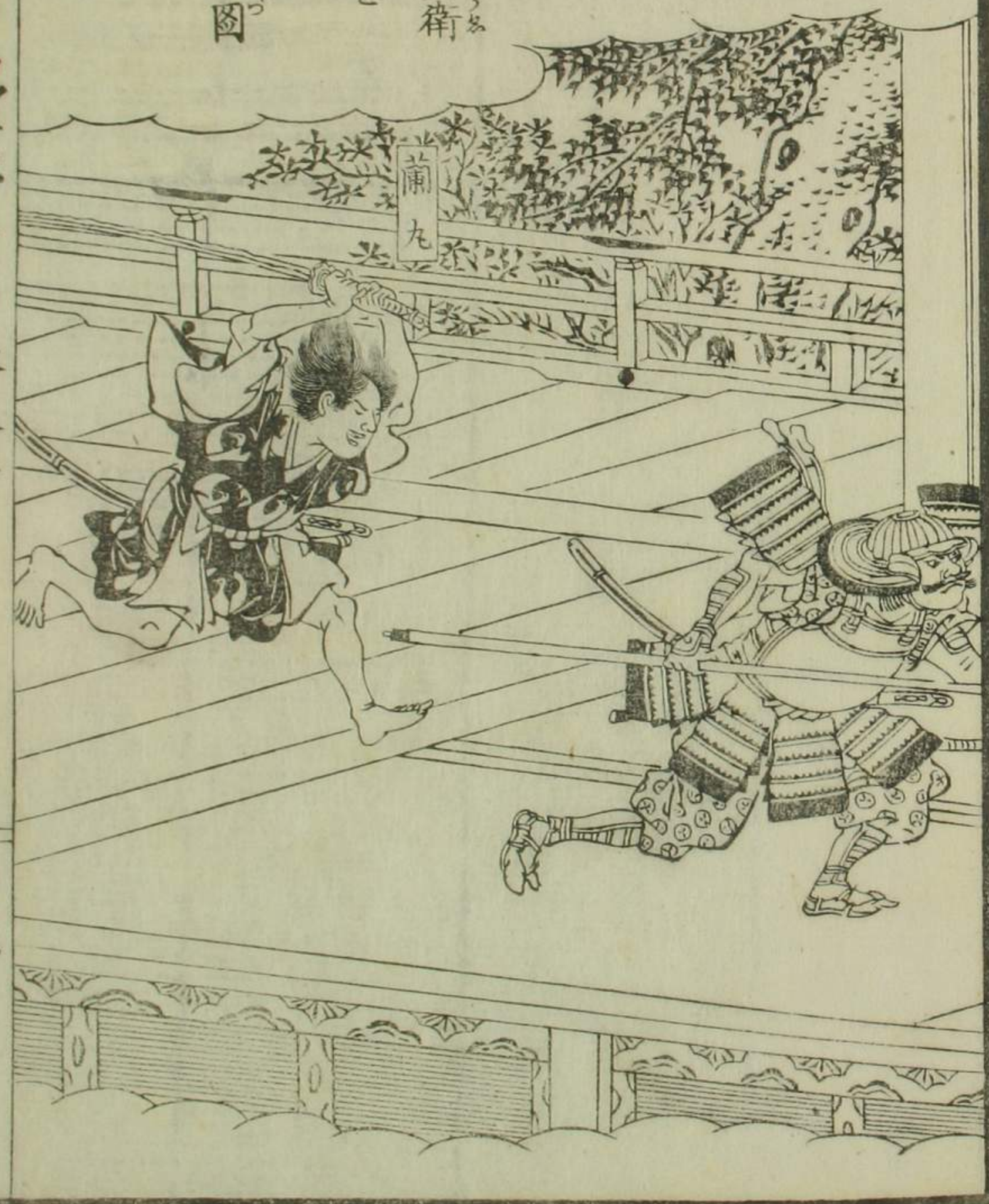
久より時移りかば味方に紛れく目指信長逃しやせん軍將明智
 左馬介大きに苛立多寡の知る寺中比織田勢風を殺しに討て取
 とて門前小馬乗居て采配揮つて指令せしむれば村上和泉守清國
 妻木主計頭範賢光春の指図を受兵卒二百人を相隨しし裏門
 口より殿中勝手口浴室茶室廁まぐも悉く張番の兵士を附させ大
 將信長公を逃すまじしと眼を配つて構きしむ尤裏門の外面乃方にハ
 疾より搦手の寄手の勢と比田帯刀則家天野源右衛門國次小命
 して門戸を鎖せて五百余人出入の者を吟味ししかり噫夫雲を凌ぎ
 中宙を翔らば卒知ず籠中の禽を圍む小等しき光秀の軍配小陥られ
 信長實に御運の盡る時節かゝるべし時殿内の庭上へ向ひて船木

蘭地三宅們を始めし明智方の勇士込入各々殿上へ蒐登らんし
 す枚戸の陰に信長公の立居給ふしは心着ず皆與殿目懸し亂れ入
 んし信長故意矢頃不近着給ひ天性強弓手練乃大将ふれは了事養
 由の妙手にも耻給はず一々賊兵們射殺し兵人と矢継疾小弓引絞りて
 横しふきの雨乃如く一世の憤力腕入透間もあく射つや給へば或
 ひハ胴臆肩口支肢眉間腰骨脛骨仇箭おくと射立給へば即時に
 射殺さる者十七個重傷薄瘻に苦む暫時小十六七個に逮ひる會々
 是ハ那的の所為と打瞻むれば白綾の單衣召さる上に藤色縮緬の單帶前
 に結び頭乃鬚ハ紫の打紐巻立寢所の俣乃御姿おれども食是る信長公と
 察しりなふ殊り憤怒の介面貌ハ两眼血走つて鬢髪逆立額り青筋立

て夜及ば如く信長御声荒らげて曰ひけるはやまを獄卒們能承はまき狗
 猫よりとも介主恩は知ふり毒毒と謂つべき明智光秀信長が末期の怨
 念以て久く世に在る繚有へうに七世を累ね生れ変るも此怨憎盡は
 期なるべし此昔光秀へ稟し聞せし罵給ふ介声雷の如く覚へるは誰
 う善悪義理に疎くごんや主乃邪も俺躬の勉めと思ひあつても心に耻
 入中に介憤言に氣を吞れく寒々後へ引退くもあり信長公尚も腕
 勞れずや指詰引詰箭を放し給ふ夏乃夜の太短くも東去らる人顔明
 らに着へ度る儲りの伴太郎右衛門は蘭地甚九郎小討れ正林吉吾を亂
 軍の中に陣没す矢代勝助は三宅孫十郎に討れり是を始りて御
 近小性仲間の衆士は金森義入齋魚住勝七小川愛平今川孫治郎

狩野又九郎薄田與五郎落合小八郎高橋虎松小倉松壽丸中尾源太
 郎湯淺甚介大塚亦一郎平尾平助山田弥太郎 御仲間 藤九郎藤八岩
 新六彦一弥六熊駒若の輩君臣絶体絶命の死戦なれば怒念の憤勇
 素肌も厭はず御殿の椽側前後を抱ふて面々大敵に當る苦戦の働き汗
 と血汐に全身ハ浸りて吐介息さく諾苦し氣に一吸の水も小俵に喫れ
 ず利刀白刃の下に生死を争ひ今を渥と戦ひるまば多分群敵の中に
 把圍れ亂軍乃中に陣没さす時小籠臣森蘭丸長康 美濃國岩村
 と賜に御殿の出入口へ蒐行従士の者を呼集めて敵の亂入支へる
 が介躬も大身鎗を振電し獅子憤勇の勢出して茲一大事と防ぎ在
 しが主君の御躬を危踏らまば舍弟坊丸力丸を残り止め驀直り椽

安田作兵衛
信長公を
刺さんと
為る圖



信長



安田作兵衛

玉手画

端へ蒐戻り看れば君にも御過失も亦く勢銳く箭を放ち給ふ蘭
 丸躡踞言上しけるは迎も防戦協ふに術なく匹夫の敵兵込入る上ハ
 御前を犯し奉る緝勿体あり此場ハ愚臣防ぎ候ふべし最無念口惜
 候へども何卒御心静りに御生害の程唯々願はく存じ奉ると云つ低き
 て涙に暮々まば信長公實ゆと思し召々人弓箭を投棄息吐給ひ女
 予が敵に疾火を放ち懸首級を敵へ把すべく去ばと曰ふが主従の別を御
 寢所さして蒐入給ふ此時光秀方の勇臣ある安田作兵衛と云者窺ひ
 入信長を討つ高名せんといふ寢殿へ入給ふと看るより飛乱離と廣椽
 上りて蘭丸の方へは目も懸ず鎗把延つ後追懸大将御首級を俺へ賜
 へ明智老等安田作兵衛見奉待せ給へと呼りけり韋駄天の如く追迫

つゝ鎗繰入んと做々か所信長寢所へ蒐入給ひ縁切の簀襖立断給
 へば御姿臆に陰傳りけるを作兵衛透き簀襖越に丁ど突込利鎗先
 に手徹へせしと思ふ所へ蘭丸臆の樹傳ふ如く走來り奸賊すされと罵
 も敢ず大太刀引技斬て懸る邪魔いろくふと安田作兵衛振込太刀先
 鎗に受止り丁々を一つと斬結びが蘭丸君御生害の大事に臨む敵乃妨
 害除ふ而已を必至の忠戦と働きられ安田の掌下を捲り立くと元乃廣椽
 端へ追て出尚も双方戦ひけるが作兵衛蘭丸が打込大太刀先躬をかかさんと
 て椽踏外へ仰向り成て撞地落るに下ハ水流りの鉢前の穴へ兩腰ざつほり
 閃りなき武具金物石小ふり急に飛出ん緝自由ふらば外に持てる鎗
 把放せば蘭丸尅鎗左手に拿留大太刀椽板へがりり投り鎗拿直して力

と極め安田が胴腹目懸て刺下す穂先狂ふて安田が陰囊玉を外れ刺貫、
と剛氣の作兵衛事ともせば刺し鎗を楯杖に掴み敵蘭丸が力に乗て飛
亂離と椽の上に刃登り蘭丸投する大太刀拾ひ拿蘭丸が右の片足雜落し
ける那り以て惚へりなきや蘭丸立居くまれず噓と倒る作兵衛透きば
乗懸り甲刀を放ち主人光秀の額を打破る怨の返報思ひ知やと罵り
竟に首搔落しける蘭丸行年二十二才かり花の盛乃忠義の若武者惜ま
ぬ者こそ無り小なり此間に御大将信長公にも御痛ハハくも御生害在す
壽算今年四十九才あり法号慈見院殿 森の力丸は四王殿亦兵衛小討
き同ト坊丸、亂軍に陣没す絶く御同勢三百余人一個も残す滅亡
カヘり加之上京二條の城小於くハ御嫡男信忠卿の御勢上下五百余

人同日着城あると光秀同夜小取圍ませて齋藤内藏助利三之を攻む
織田方従兵の勇臣は齋藤新五郎長瀧毛利新助秀高菅谷九右衛
門尉長頼福富平左衛門尉正清の衆士着日の夜乃草卧の上不意の夜襲
を懸られまば惑亂慌忙本能寺に等しく素肌の俣て防戦すれバ忽ち
打倒さる者計り堅甲圍鐵の武者出立小刀劍鎗薙刀電一用捨おく斬
伏廻れば所詮防戦違ふべく信忠卿ハ前田徳善院へ若君三法師丸を
預け給ひ如何もして敵中を遁れ出羽柴秀吉に託して養育せしめ俺
執の無念を晴させ上名もなき匹夫の手に懸らんより俺ハ速々に生害遂ぶ
ん疾々落延と仰せらるに徳善院ハ介御遺言に随ひ御公達を懐中に
抱き進らせ辛く敵中を潜り枝雲を霞と逃去にたり信忠卿ハ若君を

落し出され此く御心懸りも無ふり々れバ痛ハ一くも御屠腹小速び給
 小齋藤新五郎長瀧承ハリて御介杓を御奉りて介躬も介座に腹搔断
 リ毛利新助管九右衛門尉福富平左衛門尉の諸勇臣は或ひを敵中
 斬入死戦を盡し乱軍の中に陣没するも有バ同朋の者と差違へく死ふ
 もりり食名を惜み耻を知る織田の御内の功臣ふれバ一個も生存命を
 きの心も亦く主家と俱小滅亡ふさんと脱走する者ハ有ざりけり猶此
 外に信長公の命と一當所妙覚寺を宿陣と定められ同日来着せし衆
 士にハ織田源三郎勝長信長公の末子津田又十郎長利信長公の叔父同族織田九郎信
 治同く勘十郎同く小藤治等三千余人別勢して妙覚寺に入宿す光
 秀是へも軍勢分ちて同時ノ押寄攻詰り小バ何方も不意を討り夜

襲の狼狽敵ハ誰とも真闇の寝耳に貫く関の声に大將士卒も差別
 かく混渚小成り顛倒一防ぎ戦ふ氣勢ハ亦く食見苦くも素肌すまひの俣
 刀劍鎗薙を潜り脱て遁走する者過半ふりけり織田源三郎津田又十
 郎ハ殊小信長公の叔父ふり子なれば敵の季ハ根を断葉を枯す逃せむ
 討取べしとの指揮ありしは明智方の兵士皆心得り総て六個乃大將
 分を採り皆附り討取小たり斯の如く織田の一門數を盡し半夜半日
 に打平げく惟任光秀日來の宿恨一時小本意を達し々まば介鳥輔時
 軍勢を續めり本陣妙心寺へ凱陣せしめ夫々手柄せし勇士を召寄せ首
 實檢りて逮びり々る依之先禁庭を始めり都下住民の周章動亂
 唯是鼎の湧反るが如く上下何の趣意とも知る者亦く今にも京中兵變

に雁^{かり}りて赤土^{せきど}乃^ち蒼^{あき}と成^{なり}せん^んと戦^{いくさ}き魔^まへる計^{はかり}りふり^りく程

繪本石山軍記第三編卷之五

